

錦織監督

映画の現場から



雲南市が舞台の映画「うん、何？」がパリの映画祭で上映された時に会ったフランス人ジャーナリスト、リオネルさんがこのたびフランスの雑誌に、隠岐のこと、古典相撲のこと、映画「渾身」のことなどについて6ページにもわたる特集記事を書いてくれた(渾身公式フェイスブックで紹介)。

リオネルさんは、フランスで隠岐を紹介しようと、昨年行われた隠岐相撲大会にもわざわざ取材に来てくれた。数年前、エッフェル塔のすぐそばのカフェで質問攻めに遭って以来、「RAILWAYAYS」などにも注目してくれており、日本通で知られるジャーナリストの島根巖(いわき)はうれしいことである。

この連載でも何度も触れてきたが、諸外国からは日本はいろいろな意味で豊かな恵まれた国に映る。水道の水が直接飲めることや、大都会の東

●●44

古里の祭りに「理想社会」

京でさえ夜10時以降に女性が一人歩きできる安全な社会など、外から見たら驚くほどの環境がいまだに存在しているからだ。四季があり、周りが海に囲まれている自然環境に加え、大陸から伝わってきたさまざまな文化の融合の中から生まれた独特の社会環境なども、良い意味で影響しているのではないかと思う。

島国ならではの濃い地域の

コミュニティ、地域社会が密接に絡み合っていることが真の幸せにつながるということ、人間同士の信頼関係があることが健全な社会への近道ということを具現化しているのが古(いにし)えからのお祭り。安全に暮らすことや、きれいな空気や水などの好環境での暮らしを求めて人々は、技術開発や、日々経済開発をしているが、人の幸せは人とのつながりあり

ってこそ、環境あってこそ、ということも古から伝えてきたのが神事などのお祭りだったといっても大げさではないと思う。

経済的、物質的な豊かさを手に入れても、汚染された空気や水の中で生活していたら本末転倒。全国で傳承されている多くのお祭りは、現代では非合理に映ると思うが「自然(神)との共生への覚悟」であったり、つながりを喜び合う確認作業、伝承による教育の機会ではなかったかと思うと、何と合理的なことか。

隠岐の古典相撲の素晴らしさはいうまでもないが、土俵を囲む観客のうれしそうなお顔、その一人一人の相撲への熱い思いこそ主役であり日本のお祭りの真髄。世界が理想とする社会がそこにある。誇りうる地域が残っていることが最先端。祭りの楽しさは理屈ではない。古里を誇りに思える、ということも理屈ではない、のだ。

映画「渾身」は10日に浜田市で、16日に益田市で上映される。ぜひ大スクリーンで!!

(錦織良成・映画監督)

|| 第2、4金曜掲載 ||



映画「渾身」より